日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集
　　編集人　桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
　８階（〒 100-0011）
電話（03）3503-3829
FAX（03）3503-3828
http://www.conpt.jp

# CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.40　No.4
2016.7.1
（通巻 238 号）

日本新聞製作技術懇話会
会　報（隔月刊）
（禁転載）

## 目次


**CONPT-TOUR2016の足跡** …… 3

朝日新聞社　製作本部主査　**高橋　慎一** …… 4
共同通信社　経営企画室委員　**黒澤　勇** …… 5
産業経済新聞社　制作局局次長　**佐藤　洋一** …… 6
信濃毎日新聞社　印刷局次長兼塩尻製作センター長　**中沢　信也** …… 6
中日新聞社　名古屋本社技術局局次長　**水野　旬** …… 7
中日新聞印刷㈱　岐阜工場印刷部次長　**加藤　泰一** …… 8
苫小牧民報社　代表取締役社長　**横田　泰正** …… 9
日本経済新聞社　製作局長　**丸山　正人** …… 10
㈱日経首都圏印刷　代表取締役社長　**峯田　武彦** …… 11
㈱日経東京製作センター　総合製作部部長　**藤崎　毅人** …… 12
㈱日経東京製作センター　製作技術部課長　**唐澤　幸伸** …… 14
㈱日経西日本製作センター　南港工場製作部部長　**宮原　行雄** …… 14
読売新聞東京本社　制作局技術二部主任　**田久保俊章** …… 15
日本新聞協会　編集制作部長　**神田　俊英** …… 16
㈱インテック　産業ソリューション事業部メディアセンター開発グループ主任　**松尾　修** …… 17
㈱KKS 技術部部長　**犬飼　政之** …… 18
サカタインクス㈱　理事新聞事業部長　**杉本　昇** …… 19
ストラパック㈱　NS 営業部関東営業課課長　**飯山　雅志** …… 20
第一工業㈱　搬送システム本店営業部　**三浦　洋** …… 21
椿本興業㈱　京滋北陸 SD 装置営業部部長　**白井　方章** …… 22
椿本興業㈱　西関東・信越 SD 装置第一営業部システム一課課長代理　**米村　卓雄** …… 22
㈱椿本チエイン　マテハン事業部新聞ビジネス部部長代理　**後藤英次郎** …… 23
㈱椿本チエイン　エイチアールディー㈱・営業部課長　**吉田　昌信** …… 24
㈱東京機械製作所　海外事業部長　**宮地　卓** …… 25
㈱東京機械製作所　国内事業部国内販売グループ営業課長　**安部　史郎** …… 26
東洋インキ㈱　中部支社営業一部第一課課長　**渡辺　将二** …… 26
富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ㈱　新聞営業部部長代理　**宇田　謙二** …… 27

**写真に見るツアー点描** …… 28

**新局長に就任して**
宮崎日日新聞社　取締役印刷・システム担当　印刷局長兼佐土原センター長兼システム統括本部長　**高橋　淳一** …… 30

**楽事万歳**
東洋電機㈱　エンジニアリング事業部営業部部長　**加藤　隆夫** …… 31

**わが職場あれこれ**
福島民友新聞社　電算編制局電算部長　**菅野　成一** …… 32
㈱道新総合印刷　函館工場　製作部次長　**吉田　亙** …… 32

**第5回CONPT技術研究会開く** …… 33

**第42回定時総会開く** …… 34


●表紙写真提供：「CONPT-TOUR 2016 入選作より」
　朝日新聞社・高橋　慎一氏「デュッセルドルフの街にはためく旗」
●表紙製版：㈱デイリースポーツプレスセンター
●組版・印刷：㈱デイリースポーツプレスセンター

# CONPT-TOUR2016の足跡

CONPT-TOUR2016は6月2日（木）から10日（金）まで、drupaを視察の後、英国FINANCIAL TIMES社、イタリア・ミラノのIl Sole 24 Ore社、Centro Stampa Quotidiani（CSQ）社を見学、9日間の日程を予定通り消化して無事に帰国しました。今回の一行は参加者32名に事務局2名、添乗員2名を加えた36名でした。

＊

2日午前11時に成田空港を出発。予定より若干早くデュッセルドルフに着いて、ラインの河辺をしばし散策。夕食会にはCONPT-TOURに際して毎回助言をいただいているWAN-IFRAのDeputy CEO、Manfred Werfelさんを招いて乾杯。

Werfelさんには翌3日午前、「世界の新聞市場」をテーマとしたセミナーをお願いしました。――「毎日の有償無償の新聞発行部数は2014年、世界的に見ると6.4%増えた」。「2014年は大きな転換点になった。それは、新聞発行による売り上げ（印刷+デジタル）が新聞広告（同）による売り上げを上回ったことだ」などの話がありました。

講演を聞いた後はCONPT会員社の出展ブースを精力的に訪問。

翌日は「デジタル印刷」、「ワークフロー」、「輪転・後加工」の3グループに分かれて巡回。その途中、昼前に不審物騒ぎ。持ち主不明のスーツケースがあったとかで、会場の一部が一時閉鎖となる事態もありました。最終的に今回のdrupa入場者は188ヵ国からの26万人で前回より5万人ほど減少、次回開催は4年後の2020年とのことです。

ロンドンには5日に移動、6日にFINANCIAL TIMES社を訪問しました。バス2台に分乗して1号車はまず工場、次いで本社オフィスを見学、一方、2号車は本社から工場へ。本社では、製作担当のPeter Slaughterさんはじめ、編集部門も含めた3氏が、デジタル・ファーストのニュース発信、ロンドン～ニューヨーク～香港の3局リレーで24時間世界をカバーする報道体制への転換など、この10年間のデジタル部門の取り組みについて詳しく話してくれました。編集フロアの見学では「写真もOK」と、オープンなもてなしでした。

印刷工場はSt Clements Press社といって、ロンドン五輪の競技場近くにあり、FT紙だけでなく毎週約150万部におよぶ国内外の印刷物を手がけているとのこと。日本語の会社紹介パンフレットを用意してくれるほどの歓迎ぶりでした。

＊

7日はミラノに到着後、有力経済紙Il Sole 24 Ore社へ。技術担当のAlberto Borgarelliさんが出迎えてくれました。会社の事業全般と、編集部門について、それぞれ幹部の方の説明を受けました。ここでも編集会議を行うニュースルームに一行を案内してくれるなど手厚い対応。紙の新聞の重要性を強調していたことが印象的でした。

ミラノから車で1時間ほど、その夜9時。CSQ社はオフセット、デジタル両方の設備を持つ印刷会社で、稼働中のデジタル印刷設備やインサーターなどを精力的に見学しました。皆さん、ジェネラル・マネージャーのDario De Cianさんにも熱心に取材していました。

翌日の現地研修会ではdrupa総括を黒澤勇さん、上流部門を松尾修さん、下流部門を唐澤幸伸さんに講師をお願いしました。参加者一同、視察の成果を確認し合った後は近くのレストランで「さよならパーティー」。その中で、今回の視察団の同窓会は、歩きに歩いたdrupa視察にちなんで「あるっぱ会」と命名されました。

＊

ツアー行事を円滑に進めて頂いた杉本昇団長、後藤英次郎・宇田謙二両副団長、連夜交流の場を提供して頂いた吉田昌信さん、講師の方々はじめ視察団参加の皆様のご協力に感謝申し上げます。また今回、貴重な体験談、写真を多数寄稿して頂きました。ありがとうございます。

**（事務局）**

## 習慣や環境の違い

朝日新聞社　製作本部主査
**高橋　慎一**

drupa、新聞社、印刷工場と見て、技術的なことだけでなく、習慣や環境の違いが垣間見えて興味深い。いくつか紹介したい。

どこかのバーではありません。drupa会場のistという光源を扱う会社のブースでの一コマ。彼の地ではブースにお酒が置いてあるのが普通だそうだ。ちなみにフードコートでもビールが飲める。

フードコートでの一コマ。このテーブルの人たちはちゃんと展示を見たのだろうか。もちろん我々CONPT-TOURの面々は真面目に視察しましたよ。

◇

貴重な経験ができた9日間だった。ツアー参加のみなさまには大変お世話になった。知り合えたみなさまと「あるっぱ会」としての今後を楽しみにしている。

Landa社S10のコンソール。これぞ未来の印刷現場か。同型機が小森コーポレーションでも展示されていたが、簡素だった。

Centro Stampa Quotidiani社のオペレーションルーム。部屋の中に各セットの集中コンソールが設置されている。機側に行かなくても、大部分の作業をこの部屋でできるようになっているとのこと。写真ではわかりにくいが、この部屋でキャリアから新聞を取り出せるようになっていて、検紙もできる。

ロンドンの地下鉄のエスカレーターは右側に立つものらしい。大阪出身の諸兄には親近感？

## drupa 新しい未来が見えた？

共同通信社　経営企画室委員
黒澤　勇

今回のツアーはドイツから始まり、イギリス、イタリアと3カ国を強行的にツアーするという過去を見てもハードスケジュールであったことは間違いない。そんなツアーの参加メンバー34名（JTB添乗員含まず）は強者集団で、全員無事にツアーを終了できたのも納得ができた。今回も早朝午前4時にモーニングコールされ、その日の視察終了時間が夜中という1日中移動と視察を繰り返すという相当ハードな一日もあった。その中、誰一人脱落することなくスケジュール通りに視察をできたことはツアー全員の日々の自己管理がしっかりとしている証拠ではないかと感じた。

＊

今回の目玉は「drupa2016視察」だ。毎回ドイツ・デュッセルドルフにあるメッセで4年に一度開催される。縦1km、横1kmの広大な土地に19ホールあり、すべてのホールに展示されているのがdrupa会場だ。初日から内田コーディネーターのエネルギッシュな視察が始まり、気がつけばその日の歩数は2万5千歩以上歩いていた。

ツアー初日から参加してくれたのはWAN-IFRAのワーフェル氏で、WAN-IFRAがCONPTツアーを大切にしていることが感じとれた。

今回のdrupaは前回（2012年開催）より入場者数は5万人ほど減少したようだが、出展している企業ではひとつのブースを利用して展示するなど元気がある出展社がいた。目立ったのは、ヒューレットパッカード（HP）、コダック（Kodak）、ランダ（Landa）、富士フイルム、キヤノン、KBAなどで、展示方法も含め派手に自社の技術、サービスをアピールしていた。また、デジタル印刷の後工程部分のデジタル化の提案展示が多く見受けられ、マンローランドWEB、フンケラーなど多くのブースで協業展示をしていたのが目立った。今回一番感じたことは、オールインワンではなく、得意としている技術の持ち寄り「協業」という形での展示であったのでないかと思う。ただ、残念だったのが新聞関連の出展が少なく、約1500社近い企業が出展していたが、その中で新聞関連の出展は30社程度だったとワーフェル氏から聞いた時は驚愕した。

＊

その後ツアーは、ロンドンに移りフィナンシャル・タイムズ（FT）を視察した。ロンドンで気になったはキオスクなどで新聞の販売数の減少及び、フリーペーパーであった。フリーペーパーについては、地下鉄の入り口などに山積みのままでピックアップしていく人が少なかった。これは有料版、無料版にかかわらず紙離れが進んでいるロンドンを表しているように思えた。日本でも直面している課題ではあるが、ロンドンではそれ以上加速的にデジタルへのサービスに移行していることが気になった。

＊

今回のツアーでは、ご一緒させていただきました皆様にはこの場を借りて感謝したい。ツアー期間中にお二方の誕生日がありツアー全員でお祝いできたのはこれまた思い出に残るものだった。

また、大石マネージャー、内田コーディネ

ーターの初参加で新しいCONPTツアーであったのは間違いない。大石さん、内田さんはツアー中大変な負荷がかかっていたのではないかと思う。今回のツアーの象徴的とも言える写真として代表して椿本チエインの吉田さんのお祝い写真を掲載したい。ケーキは、日経西日本製作センターの宮原さんのプレゼントだった。(居酒屋吉田にて撮影：笑)

34名の皆さん、JTB添乗員の方々本当にありがとうございました。

## 腰痛持ちの独り言

産業経済新聞社　制作局局次長
佐藤　洋一

ツアーに参加せよと言われ、内心はウキウキしていたのですが､腰痛持ちの身としては、12時間の長旅、歩行困難となり皆さんのご迷惑になるかも、という思いでした。(医者からとは書けませんが)「いつもの痛み止めを2回分飲んでみて。今の独り言だから」ということで、痛み止めと湿布を20日分、コルセットを新調して参加しました。

ツアー中は幸い2回分飲む事もなく、コルセットなしで通しましたが、ホテルの広い風呂はことのほか腰を癒してくれました。残念だったのは温水便座付でなかったこと。JTB様、これが必要な人は多いと思います。次回はぜひ考慮して頂きたいなと思いました。

＊

出発の前日、前泊のため自宅を出た時からスーツケースの動きに違和感を感じながら成田空港に到着。他人のスーツケースの滑らかで静かな動きを自分の物と見比べ、どこかおかしい。案内所で靴修理店を紹介され直行。すると、車輪に巻かれているゴムが四輪とも剥がれかけ、車輪交換するか、残ったゴムを全部剥ぎ取りゴムなし(自動車で言えばホイルのみの状態)でも2～3時間は持ちますとのこと。後者を選択するも、多少動きが円滑になり、帰宅するまで車輪は無事でした。思い出の詰まったスーツケースですが、今回でお別れすることにしました。長年ありがとう。

何事も可動部分の手入れ、確認を怠ると、思わぬ事故になるものだと再認識しました。

＊

drupa入場者は26万人、世界中から見学に来ると言います。入場者数に相応しい広大な会場で、各出展社の展示から活力を感じました。実機のデモ運転、数々の印刷サンプル、そこかしこで見られた商談であろう様子を見て、機材業者様の元気が、ユーザーに伝搬してくるようです。印刷業界は安泰です!?

新聞社・印刷工場視察では、新聞の発行部数が減りデジタルに注力していると聞く。発行部数が減ったことで、新聞社の自社工場での印刷を止め委託する、あるいは同業他社と共同で印刷工場を設立、印刷機の稼働状況を改善するため印刷受託を進める、新聞印刷だけでなく商業印刷、雑誌印刷後中綴じするなど、印刷工場の中で新聞も印刷しているという文化が、欧州に吹く風の様である。

日本の新聞社でも、印刷委託、受託はさかんで、その先にある工場の形態は欧風？

駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。今回の貴重な体験の機会を与えて頂いた全ての方に感謝いたします。

## テロとデジタルとダ･ヴィンチ

信濃毎日新聞社
印刷局次長兼塩尻製作センター長
中沢　信也

四半世紀前の新婚旅行以来の2回目の海外が、初めて参加のコンプトツアー。しかもド

イツ、イギリス、イタリアの3カ国。仕事とは言え、内心ニコニコしていたら、嫁さんから「今回の出張断れないの？」と言われてしまった。一連の爆弾テロ事件を心配してのことだった。「事件直後で警備もしっかりしているだろうろうから、たぶん大丈夫だよ」と上司に励まされ、こんな見聞の機会は逃せないぞとドイツに向け出発した。

＊

無事入国手続きを済ませ、宿泊先のオランダ、マーストリヒトからバスで1時間、drupa会場のメッセ・デュッセルドルフに到着。会場の広さと来場者の多さは、さすが世界規模と驚き、事務局の内田哲雄さんの案内で、2日間とにかく歩いた。内田さんの体力にも驚きながら、これだけ多くのデジタル印刷機を初めて間近で見ることができた。性能も向上、後加工の連携も強化されていた。新聞も少部数ならデジタルで対応可能と思うとともに、限られた時間で多くの部数を印刷する場合、資材コストも含め今の技術では限界なのか？という感じも受けた。

そんな中、見学初日に富士フイルムのブースで「デュッセルドルフでテロ計画犯逮捕」の張り紙、そして2日目にはメッセ・デュッセルドルフの中央駅で「不審物発見」の一報を聞き、これはヤバいかも。そんな不安を抱えながら、フランクフルトから次の目的地ロンドン、そして、ミラノへ。

＊

見学した、フィナンシャル・タイムズ（FT）系列の印刷会社、イタリア地方紙系列の印刷会社シーエスキューとも、日本にはない、フレックスロールシステムなどの後加工を充実させ、何種類もの折り込みに対応していた。あらゆる媒体を印刷し、多品種小ロットはデジタルで。後加工の重要性を再認識するとともに、日本も、いずれこうなるのだろうと想像することができた。紙よりネット読者が多いヨーロッパの新聞社。電子版へ重心を移す中、FT系印刷会社の責任者の「カタログでもマガジンでも、何でも印刷することがFTへの貢献になる」との言葉が印象に残った。

ビッグベン

ツアー最終日、ミラノで感動の出会いが待っていた。ぼんやりとした光に照らされた、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」だ。名画を前に、しばらく立ちすくんでしまい、絵の中に吸い込まれてしまった。そして、ホテル近くの小さなレストラン。パスタのおいしさと、イタリア美人そのものの、女性店員にもうっとりしてまった。

＊

充実した9日間のコンプトツアー。成田空港駅から、上司に帰国の連絡をいれたところ「良かったねー、テロがなくて」が第一声だった。午後8時過ぎ、ヨーロッパとは違う、星空輝く長野駅に新幹線は到着した。

あるっぱ会の皆さん、JTB加藤さん、松下さん、そして連日、居酒屋吉田亭を開店していていただいた、エイチアールディーの吉田昌信さん、皆さんにこの場をお借りしお礼申し上げます。

## 厳しかった９日間

中日新聞社　名古屋本社技術局局次長
**水野　旬**

きつい旅程でした。帰国直後はヨーロッパが嫌いになったような心持ちになりましたが、今思えば、厳しいからこそ結束が強まりお付き合いも継続する、これも目的のひとつかと。現地で取ったメモ帳や、資料への書き

込みを読み返すと、入社してすぐの研修合宿時のように、かなりの緊張感でいたことに改めて気付くような次第です。

＊

初日、デュッセルドルフへは空路12時間。緊張を隠すかのように、何回もビールやウィスキーをおかわり。にもかかわらず目を閉じても、なかなか眠れません。CAから「かなり召し上がっておられます。お水をどうぞ」とペットボトル2本を渡される始末。後日、座席後方は飲み物が不足したと聞きました。私のせいかもしれません。この場を借りてお詫びします。

drupa展は全19ホールという会場の広さ、1840社という出展の多さ、ごった返す入場者など、驚きの連続でした。弊社はデジタル印刷機2機種を導入していることもあって、今後の方向を、儲けにつながる糸口を、と意気込んだもののどこをどう見てよいか途方に暮れました。コーディネーターの内田さんが精力的に案内してくださって、2日間で50ブースほどを回ることができました。万歩計は4万歩近くに。足腰は筋肉痛になっていました。

＊

ロンドンのフィナンシャルタイムズでは、Web配信への移り変わりを聞きました。2006年頃からWeb配信に比重を置き始め、当初はWeb会員7万人、印刷部数50万部から、現在はWeb会員60万人、印刷部数20万部になっています。編集者はこれまでの深夜勤務から、Web会員がパソコンを開く朝に勤務をシフトして、午前7時頃から仕事に就くといいます。印刷工場では部数減をカバーするように、15銘柄を超える地方紙や海外の新聞を受託印刷しています。先刷りした新聞等を挟み込んで発送する、インサーター設備が大きなスペースを占めていました。日本との違いを目の当たりにして、当夜はホテルのバーで遅くまで話し込みました。

最終目的地のミラノでは暑さもあって疲れがピーク。そんな中、朝刊印刷を視察した工場では、hp社製のデジタル印刷機が稼働していました。イベント対応の印刷物が主で、3人のエージェントが仕事を持ち込み、注文が多い夏は毎日4時間ほど稼働していると聞きました。ビジネスとして成立している状況を目の当たりにして、眠気が吹き飛びました。

言葉が通じなくても食事も買い物も何とかなりましたが、慣れない硬貨をバラバラ数えたり、ミラノでは図々しく値引き交渉してみたり、時間のかかる私にレジのお嬢さんが呆れ顔をするケースもあり、今思えばまさに旅の恥はかき捨て状態だったと思います。顔なじみ5人で食事する機会が多く、店に座ったらまずは「ファイブ、ビヤ」だったような。

こうやって全日程が終了。成田への機中で日本人CAから「お飲み物は」と聞かれて、いつも通りに「ビヤ」と言ったところ、後ろの座席から「ビールで通じますよ」と一声あって大笑い。延べ9日間の緊張がとけた一瞬でした。

## 驚き・感動の一言 !!

**中日新聞印刷㈱　岐阜工場印刷部次長**
**加藤　泰一**

「今日、部長の帰りがいつもより遅い？なぁ」と思いつつ出社するといきなり話があると呼び出されました。何か「ミスったか？」「転勤か？」と頭の中が駆け巡りました。なんと今度、ドイツに出張に行かないかとのこと。「ドイツ」どこのドイツ？ヨーロッパの？何しに？なんでと返答をするとdrupaの視察へ行って来い。三日間猶予をやるから返答してくれとのこと。嫁さんに話すといとも簡単に「いい機会だから勉強してきたら」と後押しされ、部長にはお願いしますと返事しました。

＊

一抹の不安の中、ツアー参加前の事前説明会・懇親会などで視察メンバーの皆さんと面

識を交わしたことで不安は解消され参加できることの喜びを感じました。

視察に行く前に目的を持たなければ、折角頂いた貴重な体験を無駄にしてしまうと自問自答しつつも欧州の食べ物は何が美味しいのか？ビールは日本と比べて飲みやすいのか?など考えが逸脱しつつもいざ出発。総移動距離21,500km強は結構ハード?なものでした。

出発待ち

最初にヨーロッパに着いて感じた事は、テレビや雑誌でしか見たことのない風景・歴史的な街並み、木々で囲まれている道路などをバスの車窓から見て感動･感激の一言でした。

＊

主目的の一つでもある「印刷総合展示場」drupaの会場は、とてつもなく広く目を見張るばかりでどこに何があるのか皆目見当もつきませんでした。ここでも「驚き」の一言。ここで逸れたらどうなる？戻れないかも？幸いにも視察団の皆について回り、事なきを得ましたが、人がごった返す中、コーディネーターの内田さんの説明を聞きながら片手にカメラ、片手にメモ帳とけたたましく動く自分がどこかの田舎者に感じられ笑えましたが、ここまで来たら恥も外聞もなく見学に集中。デジタル印刷機のバージョンアップやメーカー同士でのアライアンス・共同開発、商業印刷が主流の展示であったように思いました。

＊

視察したイギリス、イタリアの新聞社・印刷会社はオフセット印刷からデジタル印刷へ移行しつつあるとのことです。本版をデジタル印刷しセクション面をオフセット印刷、更にインサート物が多いため前日に印刷したものや他の印刷会社で印刷したマガジン（雑誌）などをインサートしている。また電子版に力を入れていることが伺われた。新聞は衰退の一途と言われ、部数が年々右肩下がりに落ち込んではいますが、まだまだ世界的に見て堅調な業界ではなかろうかと思います。しかしこの形態を見ると日本もいずれ欧州の工場のようになるのではと感じさせられました。

＊

最後に今回のツアーに参加させて頂きご一緒させて頂きました皆様とはかけがえのない貴重な経験をさせて頂き、誠にありがとうございました。今後もよろしくお願い申し上げます。また、連日部屋のみで休みなく営業をして頂いたY店長お疲れ様でした。

## 刺激的だった欧州道中

苫小牧民報社　代表取締役社長
**横田　泰正**

帰国は慌ただしかった。ミラノからの飛行機が遅れたためだ。経由地のブリュッセル空港内の二つの動く歩道を駆け抜け全日空機に乗り込む。iPhoneが刻む数字は夜9時30分。太陽はまだ高い。日本の感覚では真っ昼間。異風景・夏のベルギーである。

欧州は初めて、一度に4カ国を巡る旅も、下着は洗って、とのアドバイス付きも経験のない初尽くしのツアーだった。前日から成田入り、緊張しているのが分かる。不安を解いてくれたのは結団式。空港控え室に朝からビールが並び、これが欧州流かと、いいように勘違いして肩の力が抜けた。その後の弾丸ツアーを知るのはデュッセルドルフ入りしてからである。長旅もけがなく帰国できた。CONPTメンバー、スタッフ、添乗のJTBのお2人に感謝、感謝である。

ツアー資料に総移動距離2万1536㌔とあった。地球半周分になる。最初の行程がデュッ

セルドルフまで9354キロ。12時間の空の旅を、映画2本、本を読み、画面に刻々映し出される飛行ルートを楽しみながら過ごす。利尻島をかすめてロシア上空を横断し、スカンジナビア半島に近づいて南下した。その間ちょっとまどろんで食事2回。初欧州の高揚感もあって、ここまでは元気だった。

＊

幾そうもの船が行き交うライン川沿いの広場にたくさんの人がくつろいでいた。テーブルには例外なくビール。瓶を両手にラッパ飲みしながら歩く若者もいて、うわさのドイツ人のビール好きは本物だった。夕食のアルトビアはのどに優しい。ただ、出てきたホワイトアスパラ、カツレツには笑ってしまった。とにかくでかい。時速180キロタクシー、改札のない二階建て列車、1メートルソーセージ、有料トイレ…。マーストリヒト(オランダ)にホテルを取り、会場まで片道1時間30分を往復しながらのドイツ滞在4日間は刺激的で、一日2万歩のdrupa視察の疲れを癒すのに十分だった。

＊

邦人ガイドが景気の悪さを嘆いたものの、ロンドン塔・橋は観光客があふれ、真っ赤な二階建てバスに、ユニオンジャックが翻る中心街は、建物すべてがお城のようで「ああロンドン」である。北海道の、しつけ置き去りの男児が無事生還したニュースはこちらでも大きく取り上げられていて、ハロッズの店員まで知っていたのには驚いた。「すりと置き引きにくれぐれもご注意」。そう脅されて訪ねたミラノは、すでに真夏だった。歴史のある洗練された街。犬と散歩する市民も格好いい。スパゲティもピザもワインもおいしく、メンバーの一番人気の街になった。

＊

バッキンガム宮殿を訪ね、ビッグベンを見学、「最後の晩餐」を観た。ダ・ヴィンチ像をカメラに収めた。弾丸ツアーも心地よい疲れ、

**真剣に説明を聴くCONPTメンバー。**
**2万歩視察になりました**

と負け惜しみを言ってしまいそうな9日間だった。新聞2社、夜中を含め印刷2工場を視察したことも報告しなければならない。

## 大人の修学旅行

日本経済新聞社　製作局長
**丸山　正人**

その国境はよほど注意深く見ていないと、気づかないほどだった。ドイツとオランダの国境である。今回のツアーの目玉であるdrupa会場のデュッセルドルフから、宿泊地のマーストリヒトまでバスで往復した。高速道路を走るバスの車窓から見えたのは、ドイツとオランダともう一カ国(どこの国か不明)の国旗を描いた普通の看板だけだった。もちろん検問もなければ、一時停止もしない。それが国境であることすら、あとから教えてもらって初めてわかったほどだ。国と国が融合(統合)するとはこういうことなのかと、実感した。ちなみにマーストリヒトは欧州連合の創設条約が結ばれた地でもある。

＊

一方、テロ警戒で空港での検査はどこも厳しく、メンバーの一人が一時拘束されるというハプニングもあった。ロンドンではEU残留か離脱かを巡って激しい応酬が繰り広げられていた(はずだ)。2日ばかりの短期滞在では、その片鱗をうかがわせる光景には出会え

なかったが、国民投票の結果、離脱となった。移民急増が背景といわれているが、高齢者に離脱派が多く「昔はよかった」との心情が底流にあるという。欧州の融合は大きな曲がり角を迎えている。

*

「touch the future」をキャッチフレーズに掲げた今回のdrupaでも、大きなテーマは融合だったように思う。デジタル印刷機そのものへの関心も高かったようだが、デジタル印刷機とオフセット印刷機で刷った様々な媒体をどう一緒に届けるかということへの取り組みのほうが興味深かった。後加工と呼ばれる分野らしい。WAN-IFRAの新聞社アンケートでも「今後、より多くの仕事を獲得するのにもっとも効果的な技術は」との問いに、デジタル印刷と並び最も多かった答えが後加工（英語ではMailroomというらしい）だったという。各社の共同開発も進んでいると聞いた。

確かに、見学した英FT（フィナンシャル・タイムズ）やイタリアの印刷工場でも輪転機の存在よりも「印刷後」の加工部門のスペースがはるかに大きかった。インサーターや宛名装置、搬送キャリアがズラリと並んでいた。小ロットの数多くの新聞や雑誌を印刷して、特定の読者に届ける仕組みのようだ。1種類の新聞を大量に印刷している日本の新聞印刷工場にそのまま当てはまるはずもないが、将来のヒントになるような気がした。

*

もうひとつ印象に残ったのが、ここ数年でデジタル版シフトを急速に進め成功した英FT、伊Il Sole 24 Ore（大手経済紙）の両社幹部が「紙の新聞はとても重要で大切」と強調していたことだ。紙の新聞関係者が中心のCONPTツアー向けのリップサービスのような気もしたし、「縮小するビジネス」との前提つきでもあったが……。デジタル版の補完的な存在としての意味合いもあったかもしれない。真意はいまひとつ不明だが、紙の新聞事業が大きな曲がり角を迎えていることは間違いなく、こちらは「昔はよかった」というだけでは済まないことだけは確かだろう。

ミラノの大聖堂屋上でパチリ

ところで、ツアー仲間との融合（友好）は確実に進んだ。出発前の説明会でメンバーに持参する酒の種類を聞いて回っている夜の幹事長氏をみて「このツアーは大人の修学旅行なのだ」と合点がいった。ホテルの部屋で毎夜、開かれた飲み会「バー吉田」は皆勤賞とはいかなかったが、とても楽しかった。マーストリヒトの夜の自由時間に、メンバーの様子を見回っていたJTBのお二人は、まさに修学旅行の先生みたいだった。お疲れ様でした。皆さんとの「あるっぱ会」での再会を楽しみにしています。

## 愉快でスリリングな９日間

㈱日経首都圏印刷　代表取締役社長
峯田　武彦

進化を続けるデジタル技術の動向と欧州の新聞事情を探ろうと、成田空港から12時間のフライトを経て独デュッセルドルフに降り立った。20年ぶりに訪れた彼の地はテロ厳戒態勢の最前線。兵士の姿に一瞬、緊張が走る。ツアーは不安とハプニングが重なってスリリングな日々が続いた。

drupa展が開かれたデュッセルドルフ市街は、4年に1度の祭典に歓迎ムード一色。会場を見渡すと、中国人の集団は珍しくないが、インド人らしいグループも目立つ。地元ドイツ人を除けば、来場者の主役はアジア系だ。

1㌔㍍四方の会場を歩き回ると、寝不足の身体には堪える。デジタル印刷機は実機で高速と大判化をアピール、少量多品種に磨きをかける。環境配慮型のUVインキ、多様な製本を可能にした後加工機等々、最新機器は将来への期待とビジネスチャンスの広がりを予感させる。

日本企業のブースに立ち寄ると、「昨日、デュッセルドルフでテロが計画され…」の張り紙。早速テロの洗礼か、と緊迫したが、未遂で犯人逮捕の報道にホッと胸をなで下ろす。

＊

訪れた2つの新聞社は紙から電子版に大きく舵を切っていた。テムズ河畔に建つ英フィナンシャルタイムズ本社。「まずオンラインで情報を伝える。デジタル中心のコンテンツをつくり、それを新聞にも使う」。編集幹部の解説は明快だ。「デジタルファースト」を何度も口にし、米国→英国→香港を結ぶ3極の24時間編集体制に自信を見せていた。

伊経済紙イル・ソーレ・24・オーレは創業150年、ミラノを拠点に国内2位の新聞社。2015年はデジタル部門の収入が初めて新聞を抜いた。「広告収入の低迷と部数減から税引き後の損益は赤字だった」。デジタル部門の女性責任者は率直に語ってくれた。「3年前はもっと厳しかったが、徐々に改善している」とも。これからの重点分野にビジネススクールの教育事業、企業のデジタル化支援、イベント事業、コンテンツ・マネジメントを挙げる。IT技術とデジタル情報を駆使したメディア産業が生き残りの条件と理解した。

＊

ある日の自由時間、ケルン大聖堂を訪ねた。天を衝く中世のゴチック建築が圧巻だった。1㍍を超える長大ソーセージを皆でシェアしながら昼食を終えた。街歩きを楽しんで土産品を買おうとしたら財布がない。あのレストランに違いない、と仲間が探しに向かった。従業員に女性客も加わってテーブル下から財布が見つかった。「これは奇跡だ」。出発前からスリと置き引きには気を付けるよう注意されていただけに、落とした財布が戻ったことに誰もが驚いた。

**昼食に食べた1㍍を超える長大ソーセージ**（右）
＝独ケルンで

入出国審査で足止めされ、電車切符の買い方が分からない、地下鉄の行き先を間違えた…悪戦苦闘しながら苦境を乗り越えた時、仲間の絆が深まったのは言うまでもない。事務局の周到な準備、我儘に真摯に応えてくれた添乗員に感謝、有意義な9日間をありがとう。

## 感動、堪能それから苦戦

**㈱日経東京製作センター**
**総合製作部部長**
**藤崎　毅人**

渡航経験は数回あるものの欧州は初体験の地、案内書に季節は秋から初冬と記載されている。そんなに寒いのだろうか？位置的には北海道の札幌より少し上に位置するようだが？成田空港からドイツに着いてみると結構

暑い。地球温暖化の影響なのか？などと勝手に考えていた。

4年に1度のdrupaが開催される事もありデュッセルドルフは日本人が多かったように思えたのは気のせいか。実際drupaは、JANPSの国際版というよりもIGASの国際版といった感じ、しかし展示会場がとにかく広い。

デジタル印刷の品質も今まで見てきた物に比べると各段に良くなっている。自分の背丈より大きなデジタル印刷機などが所狭しと展示され高品質と印刷速度の速さを競っていた。その他ドライヤー付きやUV対応などインクジェットのヘッドやインキの進化も目を見張る物があった。

後工程の進化も凄まじく多媒体対応のインサーターや折込み、綴じ込み、製本、裁断。中にはレーザー加工によるカッティング、切り取り線の加工などの特殊加工のほか、Webによる遠隔管理システムでの保守管理、運用管理など。とにかく自分の目で世界の印刷機器を見られた事は感動ものであり、その反面これからの印刷事情に一抹の不安も感ぜざるを得ないものだった。

製作現場見学では紙媒体の重要性は未だにあるものの、デジタルに軸足を移している現状をまざまざと感じた。

工場見学ではお国柄の違いとしか云えない分業制と販売店を持たない事による工場内完結型のインサートと発送、梱包システム、個人向けの宛名付けなど輸送業者がそのまま読者に届けられるレベルの状態まで仕上げる、まさに多品種に対応する体制が整えられていてIFRAセミナーで言われた多品種少量生産が現実味を持って感じられた。

*

会場を後にドイツといえばビールとソーセージ。だがドイツ語のメニューを見てもチンプンカンプン。とりあえず名物ビールで乾杯と相成る。この時期ドイツはホワイトアスパラが旬というので早速堪能。ホワイトアスパラなんて日本では缶詰しか知らなかったがドイツでは親指ほどもある太い、しかも20センチくらいもある大きなやつを細いネギで4～5本一束にしてゴロリと皿に盛られて出てきた。酸味の利いたソースで食べると中々の美味。食事の心配はこの時点で消し飛んだ。

予想外に苦戦を強いられたのがトイレ。扉を開けると女性がいて、間違って女子トイレを開けたのかとドギマギした事が度々。入り口が一つで中で男女に分かれている作りになっている所が殆どのようだ。トイレの水を流すだけでも一苦労。ウォシュレットは無いし、手をかざすセンサーなど有る訳も無い。正面の壁にA4サイズのプラスチックの板があったのであれこれチャレンジして引っ張ったら流れた。

一番びっくりしたのが、ちょっと古い町のレストランでの事。小用のために入ったのだが、便器が見当たらない。薄暗い通路の先にどう見てもステンレス流し台にしか見えないものが置かれていた。近づくとセンサー付きの蛇口のような物がある。コレに間違い無さそうだ。我慢の限界と用を足そうとしたのだが案の定、欧州の人たちは皆さん背が高くて股下が長いから縁の位置が高い。半分背伸び状態のスリリングな一時だった。

だいぶ話がそれてしまいましたが楽しくもハードな視察でした。最後に事務局の皆様、ツアー参加者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## かけがえのない経験

㈱日経東京製作センター
製作技術部課長
唐澤　幸伸

冬の終わり、会社からCONPT-TOURへの参加のお話を頂きました。その数日後、CONPT事務局から現地研修会での下流部門の報告担当を仰せつかりました。以降、不安な日々が続きましたが、事前説明会で顔合わせをしてからは、期待が不安を上回りました。

＊

視察期間中は、報告書を作成する使命感から(？)常にアンテナを張った生活をしていました。メンバーから「大変ですね」の言葉をプレッシャーに感じながらも、日本での日常生活を離れてのCONPT-TOURは貴重な経験となりました。ここ数年CONPT-TOURのスケジュールは厳しいと聞いてはいましたが、実際に体感すると想像以上の弾丸ツアー。ホテルを7時出発は当たり前、移動日には朝5時出発もありました。しかし、早朝移動のバスの中から、毎日開かれた宿舎での反省会まで、メンバーの皆様と楽しく有意義な時間を過ごさせて頂きました。22時ごろにようやく日が落ちる環境も懇親を深められる一因になったかと思います。本当に楽しい視察となりました。

＊

視察内容は、現地研修会や帰朝報告会でさせて頂きますので、ここでは余談を。各空港からの出国は、テロの影響から検査が厳しく時間がかかると事前に説明を受けてはいましたが、想像以上。手荷物検査時は、身ぐるみ剥がされるような状態でした。搭乗手続きの際には、超過料金が発生する23kgを超えないか毎回ハラハラ。帰国前のイタリア・ミラノ空港では、お土産、drupaで入手したパンフレットや新聞などで誰もが荷物が多くなってギリギリ。私もオーバーしていましたが、「チャオ」の一言で見逃してもらいました。これら空港での出来事は、私達にとって、楽しいアトラクションの1つ。後に酒の肴となり多いに盛り上がりました。

＊

視察した新聞社のインサーター設備の充実ぶりには驚きました。また、日本の新聞の品質の高さ、工場の設備の充実ぶりを改めて感じることができました。日本にマッチするかは別として海外の新聞印刷事情を認識することができました。

最後に今回CONPT-TOURを御一緒させて頂きました皆様ありがとうございました。9日間もの長期間、皆様と時間を共有できたこと、視察内容について意見交換できたこと、貴重な財産となりました。これからは「あるっぱ会」としてお付き合いが続きますが、よろしくお願い申し上げます。

## たくさんの出会い・感謝

㈱日経西日本製作センター
南港工場製作部部長
宮原　行雄

上司からCONPT-TOUR参加を告げられ、思い出したことがあった。前回CONPT-TOUR2015に参加された日経・宮本製作担当の会報誌での感想文である。「“英語の勉強”海外に行って必ず思い、帰国して必ず忘れる」と書かれていた。感化された。「まだ間に合う。取り敢えず勉強をしよう！」と自分に言い聞かせ会社帰り、英会話教室に通った。レッスン終了後帰宅すると、家内から「お疲れ様、今日はどうだった？」と毎回聞かれるのは辛かった。早々に身に付くものか(怒)。家内に「レッスン料、ドブに捨てるようなもの」と罵られたほうがよっぽどマシだ。口喧嘩して気が紛れ、疲れがフッ飛んだに違いない。先生からは「努力は必ず報われるわよ♡」と言われた。「参加することに意義がある」のオリンピ

ック精神的なニュアンスで聞こえた(腹が立った)。結局、何の努力も報われることなく見事にドブに捨ててしまった。

＊

ドイツ・デュッセルドルフでのdrupa視察は驚きの連続であった。会場のデカさ・人の混みよう、それから欧州の新聞事情を示唆したかのような新聞印刷関連の出展数の少なさ(寂しい限り)。展示されているのは、商業印刷機器主体である。デジタル印刷機や後加工機の実機デモンストレーションが盛大に行われていた。広大なブースでは、アイドルさながら目が眩むくらいの照明・演出で最新鋭機器が発表されており、照明もないのに目が眩むコンパニオンにも驚かされた。

ロンドン滞在中、地下鉄駅地上入口では無料新聞が台に積まれ、街ゆく人が持ち帰る。違う駅では人が配っている(写真)。日本でもありそうな光景であるが、電車内ではたくさんの人達が新聞を読んでいた。日本より間違いなく多い。偶然だったかもしれないが、新聞離れはしていないのかなと思え嬉しくなった。滞在ホテルの近くには通りから見えるウインドゥに日用雑貨や食料品が所狭しと陳列されている(イギリスっぽくない)。レストランやカフェもたくさんあった。それらの店頭看板にはアラビア文字で店名が書かれている。その雑貨店の店前には、英語の他、フランス語、スペイン語、アラビア語等、色々な言語の多種多様な新聞がニューススタンドに並んでいた。欧州連合(EU)統合の時代の流れの中、移民が流入し、ロンドンが以前よりもグッと多民族社会に移行している状況が窺える。そんな状況の要因もあったせいか、帰国2週間後の6月24日「英、EU離脱へ」の大きな見出しが夕刊1面を飾った。

＊

今回の視察では、日本と違う海外の新聞事情を垣間見ることができた。9日間移動が多くハードな時もあったが、非常に有意義・貴重な時間を過ごすことができた。何よりたくさんの人に出会えたことに感謝いたします。

## ハードでも有意義だった9日間

**読売新聞東京本社**
**制作局技術二部主任**
**田久保　俊章**

CONPT-TOURには初めて参加した。いずれ自分も行く機会があるのだろうかと漠然と考えたことはあったが、こんなに早く自分に順番が回ってくるとは思っていなかった。

所属長から打診を受けたとき、英会話に苦しむ自分の姿が浮かび、期待よりも不安の方が大きかったが、見聞を広めるチャンスと思い、「行きます」と返事をした。

＊

海外はプライベートを含めて十数年ぶり。パスポートを作るところからバタバタと始め、生活に必要なものを手当たり次第に買い集め、旅の準備は順調だった。海外出張の準備はというと、十分な時間があったはずだが、気持ちばかりが空回りして用意が全く進まない。drupa2016の見どころの確認、見学先新聞社の下調べなど、やっておいた方がよいことは沢山あるのだが、日々の業務にも追われ、あっという間に出発の日がやってきた。

期待半分、不安半分で成田空港に到着。徐々に高まる気持ちを抑えながら成田を飛び立った。約12時間という気の遠くなるようなフライトを終え、目的地のドイツ・デュッセルドルフ空港に到着すると、そこは初めて足を踏み入れるヨーロッパの地。せっかくだから少

しのんびりしたいという心の叫びは届かず、翌日からハードな視察が始まった。

想像を超える広さのdrupa会場では、思うように見学が進まずに苦労した。初めて目にする海外新聞社、特にフィナンシャル・タイムズ社では、緊迫する編集現場での仕事ぶりを見ることができたのは、貴重な経験だった。イタリアの印刷工場では、朝刊印刷を見学したが、コスト削減と自動化が進んでいた。ただその影響だろうか、人の手を掛けていない分、紙面品質では日本の新聞の方が勝っていると感じた。

＊

ロンドンでは、希望者3名でテニス四大大会会場のウィンブルドンを訪れた。午前中の短い休息時間を使っての訪問だったため、センターコートの芝を見ることは叶わなかったが、地下鉄を逆方向に乗ったり、何度も道を間違えたりと、トラブル続きの珍道中は良い思い出になった。

**ウィンブルドンのセンターコート入口前**

最後になりますが、初めて参加したCONPTツアーは、良き仲間に恵まれ、とても楽しく有意義な9日間でした。事前の準備から細かく段取りしていただいた事務局の皆様、寄せ集めの集団を一つにまとめ上げてくれた団長、副団長の皆様には感謝申し上げます。また、日中の活動だけでなく、連日の部屋飲みに参加させていただき、皆様と交流を持てたことも大切な財産です。ご一緒させていただいた皆様にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 印刷産業のトレンドを実感

**日本新聞協会　編集制作部長**
**神田　俊英**

4年に一度開催される「drupa2016」をぜひ一度見てみたいとの思いで、初めてCONPTツアーに参加した。

最初に、デュッセルドルフの会場に着いて目に飛び込んできたのは人の多さと会場の広さ。前回より来場者は減ったものの183か国から約20万人と聞きびっくり。全部でブースは19ホールあり、JANPSとは比べものにならない広さで、二日間で全部見るのはとうてい無理。テーマやメーカーを絞って回るしかなかった。噂には聞いていたが、さすが世界最大の国際印刷機材展だと実感した。

今回のキャッチフレーズは、「touch the future 未来に触れる」。

商業印刷が主流ではあるが、デジタル印刷や後加工、クラウドを中心としたシステムなどメーカーの最新技術が紹介されていた。各ブースとも工夫を凝らし、派手な演出で来場者を呼び込んでいた。なかでもHPは1ホールをすべて借り切るなど物量とも他を圧倒していた。全体的に実機展示や実演デモが多く、活気があったように思う。

＊

今回のトレンドはやはりデジタル印刷機だったのではないか。展示社も多く、各ブースとも多くの来場者で賑わっており、世界的に主流になっているように感じた。特に、オフセット輪転機メーカー（ランダ、マンローランドなど）がデジタル印刷機メーカーと提携して出展しているのが特徴的であった。日本の新聞各社でもデジタル印刷への関心が高まっているが、今後本紙印刷に向けて何らかの

ヒントが得られたのではないか。私自身も複数のメーカーを回り、話を聞いたが、正直メーカーの技術の差異はよく分からない。ただ、今後のメーカーの開発により日本の新聞社で本紙印刷が行われる日がそう遠くないように予感した。今後注目していきたい。

drupaは2日間と短い日程だったが、最新の技術を見聞きし、世界の印刷産業のトレンドを肌で感じることができた。

＊

その後、ロンドンに向かい、フィナンシャルタイムズを訪問した。昨年日経が買収し話題となっている新聞社だが、編集幹部から直接話を聞き、編集室を見学できたのは貴重な経験であった。デジタル中心の編集方針は日本の新聞社との差を強く感じた。

仕事の関係で、ミラノには行けずロンドンから一人で帰国した。最後の打ち上げに参加できず残念だったが、ツアー中、夜遅くまで酒を飲みながらメーカーや新聞社の方々と話ができたことは貴重な経験だった。今後参加者の皆さんとの末永いお付き合いをお願いしたい。

帰国後、一日おいて富山市に出張した。時差の関係で眠気を抑えるのが大変だったが、今は長い出張も終わり少しほっとしている。

## 初めての海外出張 -drupa 2016-

㈱インテック　産業ソリューション事業部
メディアセンター開発グループ主任
松尾　修

会社（当時、日本システム技術㈱）に入社して18年、新聞製作システムの開発に従事してきた。しかし、昨年初めて他業界に異動になり、この4月に1年ぶりに戻ってきた。その直後に、上司からツアーへの参加を指示された。空白の1年のブランクを埋めるには十分すぎる機会だと思い、参加することに決めた。また、初めての海外出張で心躍るところがあった。しかし単に参加するだけでなく、ツアーの研修会の講師を担当することになっていた。

＊

そんな不安に包まれた状態でツアーに臨んだがツアー自体は大変有意義なものであった。まずWAN-IFRAのセミナーでは、ワーフェル氏の講義で世界の新聞業界の動向、drupaでの見学のポイントを講義いただいた。

＊

そして、その情報を参考に、drupaの見学に臨んだ。初日は全員での見学で下流工程がメインであったため、上流の報告のネタはほとんどゲットできなかった。

話が横にずれるが、会場で一番驚いたのは、会場で昼間から、みんなビールを飲んでいることだ。日本の展示会では見たことない風景だった。また、売店でソフトドリンクを買おうにも、ビールしかないと断られる状態にカルチャーショックを受けた。

＊

翌日は、上流／下流／デジタル印刷のグループに分かれて見学することとなっていたが、上流は、32人中わずかに4人であった。さらに午後から2人が別れ、事務局の方と私二人になってしまった。そんな中、会場で不審物騒動が発生。一時、ホール間の通路が封鎖され、シャトルバスで遠回りする羽目にあい、見学どころではない空気となった

それでも一番興味のあったブースで、プレゼンテーションとオペレーションデモを見ることができ、日本語のカタログも入手できたので、満足であった。このときプレゼンを録画していたのだが、後で確認すると撮れてい

なかったことが判明した。

drupa見学が終わり、翌日からのロンドン・ミラノの企業視察は、かなりの強行軍であった。

印刷会社の見学では、私が約十年前に某新聞社にお納めしたシステム（すでに撤去）で使用したアプリケーションが動いており、久々の再会に感動した。ただそれは、下流系のシステムで、今回の私の報告には書けないという歯痒さがあった。

＊

最後の研修会も（他の皆様の評価はさておき）何とか乗り切れ、貴重な体験もできたので、参加させていただいたことに感謝したい。ありがとうございました。

## ～ PRINT4.0 を感じて

㈱ KKS 技術部部長

犬飼　政之

「イタリア!!」滞在都市を知り小さくガッツポーズ。イタリアは一度行きたいと思っていたからです。そんな逸る気持ちを抑え、先ずは本題とdrupaについて調べました。「プリント4.0」？「機械とシステムをインテリジェントネットワークで接続するデジタルワークフロー」と記載がありましたが、今一つピンときませんでしたので、この辺りを学べればと思いながら今回のツアーに参加させていただきました。

drupa会場は19の展示場があり、東京のビッグサイトと幕張を足してもまだ広くとにかくよく歩きました。後に聞いた話では初日は約2万歩、二日目はそれを大きく超えました。人を躱しながら歩くのはかなり体力を使いますが、企業の説明を熱心に聞くメンバーに引っ張られるように足が前に出ました。展示のメインはデジタル印刷機でしたが、その各ブースで目にしたのが下流工程のFinishing装置です。上流より流れてきた印刷物を自ら測定、バーコードを読み取り異なったページ数においても一部ごとに自動的に糊付け量や断裁サイズを調整し製本していました。オペレータの調整を必要としないタッチレスワークフロー、機械とシステムが融合した「4.0」を学び、世界は市場の先を見て動いている事を実感しながら会場を後にしました。

＊

最終日の自由時間は、好奇心から地下鉄に乗り、ミラノ大聖堂があるドゥオーモまで向かうことにしました。

＊

車内ではスリに対して事前に注意を受けておりましたので警戒態勢。すべての意識をリュックの中の貴重品に向けていました。ドゥオーモ駅に到着し地上に上がると、目の前に壮大で美しいミラノ大聖堂が見えました。

ミラノの象徴であるこの建築物は、500年をかけて建築された歴史あるゴシック建築物で重々しく威厳がありました。また、その北側にはガッレリアと呼ばれる十字型のアーケードがあり、中央のガラスドームの天井にはフレスコ画、床にはモザイクなどの芸術作品があり、その中心に話題の「幸運の牡牛」が描かれておりました。スリ、強引なミサンガ売り、少し油断ならない町ではありましたが、とても芸術的で美しい歴史ある都市、ぜひ次は妻に見せたいと思いイタリアを後にしました。

最後になりましたが今回のツアーを企画運営された皆様、またツアーへご参加の皆様に大変お世話になりましたことをこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

## 21年ぶりのdrupaと小雨のマーストリヒト

サカタインクス㈱　理事新聞事業部長
杉本　昇

今回7泊9日間のツアーにおいて、drupa会場を2日間、ユーザー視察をロンドン1社2ヶ所、ミラノ2社というかなりの強行軍ではありましたが、オン、オフタイム共に参加メンバー全員が連帯感を持ち、学び、行動することが出来たツアーであったと実感しています。

＊

私の場合、drupaだけをとらえますと、1995年以来、21年ぶりの視察となりました。前回は弊社ツアーで参加しましたが、その時期は国内の商業印刷業界において刷版部門のCTP化が始まる『CTP元年』の年にあたり、大手印刷会社以外は新聞社を含め、CTP化はこれからという状況にあり、各ブースの展示内容は、CTPほぼ一色で、ツアー参加者は全員、異口同音にCTP設備投資についての話題に盛り上がっていました。新聞・オフ輪印刷機については国内外のメーカーが実機稼働によるデモを派手に行い、印刷業界全体において、まさに大型設備の全盛時代といえる内容でありました。

＊

それに対して、今回は新聞・オフ輪転印刷機の実稼働デモは一切なく、今回ドルッパのメガトレンドである『プリント4.0』のもと、主要メーカーがおしなべてデジタル印刷機を全面に出し、その上流工程のデータ処理システム、その後工程の折り・帳合・製本等のシステムを総合的にデモし、他社との差別化（紙面品質、印刷速度、印刷サイズ等）に重点をおいていたのが、総じて印象的で、21年前と比較すると隔世の感がありました。

＊

ユーザー視察についてですが、フィナンシャル・タイムズは従業員2200名中、ジャーナリストが約550名を占め、全世界約40ヶ国を網羅しており、内容的には10年前が紙媒体50万部、電子版購読者数7.5万人が、現在、紙媒体数20万部、電子版購読者数60万人ということで、購読者総数が伸びる中で、電子版の占有率が顕著にアップしていることが判りました。

その後、ミラノにおいてイタリア第2位の新聞社　Il Sole24 Ore、出版・新聞社2社の共同出資印刷専業社CSQを視察致しましたが、一番印象に残ったことは、後加工に「インサーター＋結束機」を駆使して、新聞本紙に折込広告・チラシ等を挿入した完成状態でラップされ、発送されるというシステムが確立されていることでありました。日本では周知の通り、新聞販売舗で行われている折込作業が、本紙印刷の後加工においてインライン化されていることが大変勉強になりました。

＊

drupa視察中はデュッセルドルフから約110km離れたオランダのマーストリヒトに宿をとりましたが、1993年11月にEU設立の条約が締結された由緒ある都市で、夕方、小雨の中を男6人で聖ヤンス教会を散策した後に、

有名なフライトホフ広場のカフェで美味でボリューミィなステーキを赤ワイン片手に頬張ることができたことは、最高の思い出となりました。

ヤンス教会

最後に、微力ながらも団長という大役を拝命し、参加メンバーの方々と共に、よく学び、よく歩き、よく呑み、親交を深め、無事にツアーを終えることができたことを関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

## ～初めてのヨーロッパ、憧れのロンドン、ジミヘンゆかりのホテル～

ストラパック㈱　NS営業部関東営業課課長
**飯山　雅志**

今年CONPT-TOURに参加させて頂きました。私自身2回目の参加となります。前回の参加は1999年、アメリカ国内2週間の長旅でした。今回は初のヨーロッパ、それも一度は見てみたいと思っていたdrupaを視察出来るとあって、上司から参加するように言われてから出発までの約2ケ月、恥ずかしながらずっとテンション上がり放しでした(もちろん不安もありましたが)。

12時間ほどのフライトの後、デュッセルドルフに降り立った時は意外と冷静だったりしましたが、移動のバスの中から街並みを眺めているうちに、実感が湧いてきました。とにかく、このデュッセルドルフの地で楽しみだったのは、決してビールではなく(もちろん、それも楽しみでしたけど)、やはりdrupaでした。4年に一度の、欧州一いや世界一とも言われる大規模な印刷技術展示会です。興奮するなというのが無理な話で、実際、デュッセルドルフへ向かう機中で、隣に座っていた日本人の男性(もちろん、知らない人です)も印刷業界の人だそうで、「この世界にいたら、一度はdrupaに行きたいですよね」と言っておられて、やはり思う事は同じなのだな、と嬉しくなりました。そのdrupa、想像していた以上に大規模で華やかで各ブースに居並ぶ最新鋭の機械もインパクト十分、ひたすら圧倒されていました。情けない話ですが、目的は視察であるにもかかわらず、「すげー」と言ってるだけで終わってしまったような気がしないでもありません。

drupaのレポートは、私よりもっとしっかりした皆さんが、素晴らしいものを上梓されると思いますので、私は憧れのロンドンについて、少々書かせて頂こうと思います。

＊

ロンドンは快晴でした。ガイドさんも、こんなに晴れるのは珍しい、というくらいの快晴の下、市内の名所を観光してから宿泊先へ。宿泊先はThe Cumberland Hotelという由緒あるホテル。ロビーで辺りを見回していると、ふと気になったのが、壁に飾られている何点

かの肖像画です。よくよく見ると、ジミ・ヘンドリックスの肖像画でした。何故、ジミヘンの肖像画が飾ってあるのか、とても気になりまして調べて貰ったら、なんと40数年前に、

このホテルの一室でジミヘンの遺体が発見された、すなわちジミヘンが亡くなったホテルがここ、The Cumberland Hotelだったのだそうです。言うならば、ジミヘンゆかりのホテルという訳で、こう見えても洋楽好き(ロック好き)の私としては、とても貴重な体験をした気分になりました。周囲に自慢する、というほどでもありませんが。

*

とにかく初めてのヨーロッパ。日が長いとか、屋外の喫煙は意外と規制がゆるいとか、博物館等でも写真撮影OKの所が多くて驚いたとか、小学生のような感想ばかりで情けない次第ですが、それだけ展示会も新聞社見学もちょっとした観光も、十二分に満喫できたという事になります。同行の皆様、参加させてくれた会社、快く送り出してくれた家族、全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

再びロンドンに行けることを願って。

## 早い！速い！遅い？！

第一工業㈱　搬送システム本店
営業部
三浦　洋

10時間を超える座りっぱなしのフライト。

3時間以上のフライトを味わった事がない自分に耐えられるのだろうか。否、動けない・寝られない・気軽にトイレに行けない。嗚呼、到着まで6時間もあるのか。心が折れそうになりながら、ようやく踏み入れたドイツの地。日本は深夜。ドイツは夕方。ほぼ寝ていない状態でビールとワインを飲み、大量のホワイトアスパラと草鞋のようなフライドポーク？を胃袋に収め、「これから9日間大丈夫だろうか」。不安と満腹感で胸がいっぱいでした。

*

まずはドイツ・デュッセルドルフでの「WAN-IFRAセミナー」及び「drupa展」の視察。世界最大規模の印刷機材展。広い！人が多い！今回の開催テーマは「touch the future」と題し、より現実的な未来を視野に入れた展示物が多かった様に感じました。

*

ドイツで3日間を過ごし、イギリス・ロンドンへ。早朝移動に多少の疲労感を感じつつ、一度訪れてみたかったロンドンへ到着。英語圏に妙な安心感を抱きつつ(全く話せませんが)、早くも2か国目。ロンドンでは、FT（フィナンシャルタイムズ)本社及び工場の視察を実施しました。FTでは10年前よりウェブ版へ徐々に移行しつつあり、2016年現在ではウェブ版購読者の割合の方が多く、ウェブ版ありきでの紙面作りをしているという、設備メーカーにとっては耳を覆いたくなる様な事実を突きつけられました。工場についても、業務をすべて委託しており、我が社が得意とする発送コンベヤ関係は、そこから更に別会社へ委託しているとの事でした。発送に関して意識はあまり高くないと感じ、非常に寂しい限りです。前述の通り、一度訪れたかったロンドン。素直に喜べないファーストコンタクトとなりました。

*

そうモヤモヤしている内に本ツアー最終国のイタリア・ミラノへ。ミラノではIl Sole 24 Ore及びCSQの視察。Il Sole社では、紙面ありきで、あくまでウェブ版は紙版のレプリカという位置づけ。紙面も4セクションに分けた最大56Pの大ボリューム。素晴らしい！夜はCSQでの朝刊立会を敢行。あまり能力は期待できそうにはないプッシャー式の仕分装置を見つつ、瞬く間にミラノの視察も過ぎて行きました。

総じて、意外と早朝移動が多い。ロンドンの地下鉄のドアの開閉は速い。ヨーロッパの日は落ちるのが遅い。と、無理やり題名の伏線を回収しつつ、、、今回ツアー初参加、ヨーロッパも初入国、一週間以上の出張も初と、

全てにおいて初体験のため非常に不安ではありましたが、大先輩方々にぐいぐい引っ張って頂き、とても安心な・とても充実したツアーとなりました。一人では決して訪れなかった数々の機会。今まで生きてきた人生においてかけがえのない経験となりました。今回参加された皆様及び関係者の方々へ厚く御礼を申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

## 世界規模に感動

**椿本興業㈱　京滋北陸 SD 装置営業部部長**
**白井　方章**

今回、CONPT-TOURも初参加、欧州の渡航も初めてなので非常に楽しみでありました。渡航前日AM12時(当日)迄、現場立ち上げ調整中の最中、後は部下に任せ不安ありの出発でありました。

出発前には結団式を行い、いざ出発。12時間の飛行時間、モニターを触っていると何と【下町ロケット】が最終話まであり、テレビ放送を見ていなかった私は鑑賞、大企業と中小企業の絆に心を打たれ、また金銭では獲得できない技術力の貴重さを感じ、一睡もせずあっという間にデュッセルドルフに到着。楽しみであった夕食、ビールを手に乾杯「白アスパラのスープ」少し塩分が多めだが、まあまあであった。次に「白アスパラとチキンかつ」は正直ボリュームがあり、オランダ人はこんなに食べるのか・・と思うほど、やはり完食出来ずにホテルへ移動、1日目を終える。

翌日drupa視察に向け移動。high-wayを走行しながら窓越しに見える景色は森林や野畑、牧場と長閑な風景に安堵を感じ会場に到着、そしてその広大さに驚き、これが世界規模の展示会か…と実感。更に日本企業の出展の多さにも驚き、やはり国内需要では成長が厳しいため、グローバル展開が必要であることを感じました。また、Hewlett-Packard社はCPUハードメーカーのイメージを持っていましたがブース全面にハード・ソフト・システムを展示、相当な技術力を感じ、展示会視察を終えました。

＊

イギリスのFinancial Timesの見学では、工場が稼働していなかったのが少し残念でしたが、非常に印象だったのが折り込みチラシやマガジンのインサート物の多さです。事前印刷を行いロール状でストックし、必要なタイミングで本紙に自動インサートしていました。日本の業態とは異なり、販売店でのインサートでは品質が保持できないようです。

＊

Il Sole 24 Oreの見学、イタリアでもやはり日本同様に新聞発行部数の減少、広告収入の苦戦と言う問題があるようです。それを賄うためにはサブスクライパーがいかに支払いをしてくれるかであり、デジタルはフリーで閲覧することが出来ず、閲覧回数により有償としているようです。

最後に今回皆様にお世話になり有難うございました。色々とエピソードもありましたが無事に帰国できたのも皆様のお陰だと思っております。今後とも末永くお付き合いの程宜しくお願い致します。

## ベーカー街 221B に行けた

**椿本興業㈱　西関東・信越 SD**
**装置第一営業部システム一課課長代理**
**米村　卓雄**

今回のツアーでは1カ国目のドイツではdrupa展を視察。print4.0をうたい広大な敷地に各社とも主にデジタル印刷機を展示しており、時代の流れを肌で感じました。

＊

2カ国目のイギリスではフィナンシャル・タイムズを視察。空いた時間で大英博物館、バッキンガム宮殿、ビッグベン他を観光。し

かしながら感動したのは学生時代に傾倒した『シャーロック・ホームズの冒険』の作中に登場する『ベーカー街221B』とそこに建つ『シャーロック・ホームズ博物館』を自由時間に訪問できた事でした。

＊

ここが数々の難事件を解決した舞台かと一人感慨に浸っていました。今回の機会がなければ生涯訪問する事はなかったであろうと思います。

シャーロック・ホームズ博物館

さてフィナンシャル社の印刷工場ですが、巻取搬送設備に関しましては印刷工程や印刷部数によるところが大きいと思いますが、日本より簡素と感じました。印象的だったのは日本と違い印刷工場から出荷する時点で折込みチラシや雑誌をインサーターで本紙に挿入する事です。

＊

3カ国目のイタリアではIl Sole 24 Ore他を視察。新聞発行以外に教育・カルチャーにも注力しており多方面に事業展開されていると感じました。

帰国後イギリスのEU離脱でポンド安とユーロ安となり、ツアーで残った外貨が両替できないまま為替レートを毎日チェックする悶々とした日々を過ごしております。

最後に参加された皆様には御世話になり厚く御礼申し上げます。今後とも末永いお付き合いのほど、宜しく御願い申し上げます。

## 日本と欧州の違いにびっくり

㈱椿本チエイン　マテハン事業部
新聞ビジネス部部長代理
**後藤　英次郎**

12年ぶり4回目のCONPT-TOUR参加。30代、40代前半の頃と今回では体力的に大きな差があり、日程も厳しく、ついていくのが、精一杯で何とか乗り切ったというのが実感でした。drupa視察、IFRAセミナー、ロンドン・ミラノでの新聞社見学、いずれも日本とは考え方の違いや欧州の様々な事情から、日本とは考え方が違う物を見ることができました。私は初めてdrupaを視察しましたが、規模の大きさにびっくり、JANPSが情けなく見えてしまい、JANPSを少しでも改善していかねばならないと強く感じました。通訳の内田様の説明がわかり易く、デジタル印刷機の素人である私でもある程度理解でき、有意義な見学をすることができました。内田様には、感謝です。ただ、2日間広い会場を動きまわり、足が限界。きつかったですが、夜のビール・ワインは格別で毎晩欠かすことなく皆様と楽しく過ごしたことも良い思い出になりました。皆様本当に有難うございました。私はアジア圏には出張で行っていますが、欧州は、行く機会がなく、景色・食べ物・歩いている人等々、何もかもが新鮮に見えました。ただ、日本と違うなと思ったことが、いくつかありました。日本の常識では考えられない。びっくりです。

＊

・繁華街にトイレが少ない。

日本では百貨店の各フロアにトイレがあるのは常識ですが、ロンドン・ミラノでは、館内に数か所しかなく、不便だなと感じました。わざわざカフェに入って、結局ビールを飲んでまたトイレに行きたくなる？

＊

・喫煙マナーは日本が上
レストラン・ホテルなど禁煙の場所は日本より多いのに、外では煙草のポイ捨てが多く、携帯灰皿を持っている人は日本人だけ？喫煙所も建物の前に小さな灰皿で、周りに吸い殻が落ちる状態で、日本の方がきれいだと思いました。

＊

・料理が塩辛い
ドイツのソーセージ、ロンドンのベーコン等々全てがしょっぱいです。日本料理の繊細な味付は、欧州ではありえない？高血圧の人にはよくない食生活だと思います。

＊

・石畳の道が多い
日本のようにアスファルトの道よりも石畳の道が多く、古い建物とマッチして日本と違う美しい景観でした。

＊

あっという間のツアーでしたが、充実した日々を過ごすことができました。それも参加者皆様と事務局の方のお蔭です。本当に有難うございました。「あるっぱ会」で、お会いできる日を楽しみにしております。今後もよろしくお願い申し上げます。

## 居酒屋・・・

㈱椿本チエイン
エイチアールディー㈱・営業部課長
吉田　昌信

CONPUT-TOURに参加が決まり、渡航経験が少ない私はまず、期限の切れたパスポートを更新する事から始まりました。初めてのヨーロッパ、長時間フライト不安半分、楽しみ半分で準備を進めましたが、5月の事前説明会で滞在するホテルでの開放部屋に任命され、過去参加した方からこのTOURは皆さんお酒をたくさん飲まれると聞き不安が少し多い状態での出発となりました。

不安でした長時間フライトも無事乗り切りドイツ・デュッセルドルフに到着し、ようやく海外へ来た実感が湧きました。最初の食事は夕食会。ソーセージを期待していましたが、別の名物ホワイトアスパラでした。もうひとつの楽しみドイツビールを片手に美味しく頂きましたが、料理のボリュームがすごいです。当然ギブアップしました。

＊

さて、ホテルに戻り開放部屋オープン初日皆さん来て頂けるか不安でしたが、数十人来て頂きドイツだけど日本酒で乾杯。無事初日を終える事が出来ました。翌日はdrupa。驚いたのは会場の広さ、しかしこの広さが後で体に支障をきたすのです。この日歩いた歩数3万歩近く、足は「パンパン」腰は「カチカチ」日頃の運動不足を痛感しましたが、オープン2日目の時間、この日も日本酒で乾杯。翌日もdrupaで2万歩強、とにかく歩きます。3日目4日目と続き開放部屋も参加者が増え、私もだんだん慣れてきて楽しくなってきました。翌日はミラノに移動して最大の山場、この日は朝5時起きで夜の視察が終わりホテルに戻るのは23時30分。皆様の期待に答えられる様0時にオープンし乾杯。またこの日『居酒屋・吉田屋』と屋号まで頂きました。そして翌日のさよならパーティーでは6月2日が誕生

『居酒屋・吉田屋』　INミラノ

日となる私にHAPPY・BIRTHDAYの歌のプレゼント。この歳で恥ずかしいけれど嬉しかったです。

また、2日がドイツ移動日で時差も7時間あり31時間の誕生日と貴重な体験も出来ました。しかしこの日が『居酒屋・吉田屋』閉店の日になります。この日は本当に多くの方にご来店頂き、『満員御礼』。皆様が部屋に戻った後少し寂しくなりました。次回いつオープン出来るか判りませんが、ご来店下さった皆様ありがとうございました。

最後になりますが、事務局、団長、副団長、幹事の皆様本当にお世話になりありがとうございました。また参加された皆様『居酒屋・吉田屋』共々今後とも宜しくお願い致します。

## ロストバゲージ

㈱東京機械製作所　海外事業部長
宮地　卓

初めに皆様にご報告をしなければなりません。無くなったスーツケースですが、私の帰国から遅れること2日、無事自宅に戻って来ました。皆様には大変ご心配をおかけしました。またいろいろと手続きをし、常々状況を確認していただいたJTBの加藤様、松下様ありがとうございました。

＊

業務上海外に行く機会も多いのですが、初めてのCONPT-TOUR参加、総勢36名ということもあり、いつになく緊張感を持って成田空港のロビーに立ちました。一時はインドやイスラム圏の国々に通っていたこともあり、基本的に食事の好き嫌いが無く、社内ではどこでも生きていけるなどと言われている私ですが、やはり食事の充実度によって出張時の疲労感が変わると感じていました。今回はdrupa2016とイギリス、イタリアの新聞社の視察。ビールにソーセージ、ワインとパスタだな、などと本来の目的を忘れ考えていたのが良くなかったのかもしれません。

＊

2日間の歩きに歩いたdrupa見学を終え、次の訪問地イギリス、ロンドンヒースロー空港に到着した際、その事件が発生しました。

いわゆるロストバゲージです。過去にも数回経験のあるロストバゲージですが、大抵は翌日、翌々日にはホテルに届けられていました。原因は乗り継ぎ便で乗り継げなかった、別の便に乗ってしまったなどなど。スーツケースにはCONPT-TOURの大きなステッカーと名前、乗り継ぎ便ではないし、チェックイン時LHRと書かれたタグを付けているのを見ているし？ロンドン2日目に航空会社の捜索状況を確認した際もまだ行方知れず。この時、過去に海外の空港で見た嫌な光景が頭を横切りました。ターミナルから飛行機に荷物を運んでいる車から、スーツケースが転げ落ちるも運転手は気付かない。落ちたところは物陰で誰も気付いていない。その時はこのようなロストバゲージもあるのだなと。

＊

視察ですがdrupa見学に先立つWAN-IFRAセミナーではWerfel氏より、Print4.0、自動化、柔軟性といったキーワードの提示があり、会場ではその回答になり得る様々な製品を見ることができました。また訪問したFT社・Il Sole 24 Ore社・CSQ社では、紙とデジタルの融合を進めることによる作業形態・人員体制など、状況の変化に対応していく様子を聞くことができ、非常に興味深いものでした。

今から思えばEU離脱か残留かで国を二分していたイギリスですが、下着探しを必死にしていた私にはその喧騒も感じませんでした。今回のツアーでは各国とも天候にも恵まれ、ハプニングはありましたが、思い出に残る充実した視察となりました。ツアーを企画、運営された事務局・団長・副団長をはじめ、ツアーに参加された皆様には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

今後とも末長くよろしくお願い申し上げます。

## 1日2万歩

㈱東京機械製作所
国内事業部国内販売グループ営業課長
安部　史郎

今回で2度目のCONPT-TOUR参加。前回は3年前にベルリンとロンドンでしたが、帰国日、ヒースロー空港までの道中が大渋滞でギリギリで搭乗した苦い(危うく乗り遅れ)思い出が印象に残っています。

＊

今回の思い出は「よく歩いた」です。縦横1kmのdrupa会場(全19ホール)を歩きながらの視察なのですが、兎に角規模が大きすぎて、さあ～何処から攻めようかと、圧倒されっぱなしでした。「先ずこのブースに行って、あれを見学して、その次はあのブースに行って…」とプランを立てながら少しでも効率的に見学しようと思うのです。が、人混みと慣れない外国語と程良い？疲労感があいまって、ふと気づくと、「あれ？ここは何処？東はどっち？次に目指すブースは？」と所々で、軽いパニックに陥ってしまいました。その度に案内図を見ながら、まず自分達の居る場所を確認し、併せて人員(点呼)確認を行い、次のブースへと進んでいきました。各ブース視察を終えるたびにカタログ類を頂く訳ですが、当然その量が次第に増えていき、肩に担ぐバッグがずっしりと、程良く？疲れた体にボディーブローの如く、じわじわと効いていくことに。最終的に1日2万歩近くの記録となりました。(drupaでよく歩いたことを踏まえて、会の名前が「あるっぱ会」となりました)

＊

さて今回のdrupaの個人的印象としては、「デジタル印刷と後加工システム」です。従来の様に、枚葉機や輪転機を実演して見せるというより、デジタル印刷機等で印刷した多岐に亘る媒体を、オンラインやオフラインの後加工システムで処理していく展示が多く見受けられました。特に後加工システムのメーカーは、数多くのデジタル印刷機メーカーへ同様なシステムを供給しており、切る・折るといった基本的な機能以外にも様々な付加価値(例えばレーザーによる穴あけ加工等)を取り入れており、後加工分野の成長性を感じました。

＊

少し余談ですが、ドイツ滞在中のホテルは、オランダのマーストリヒトというEU誕生となった条約が合意された古い街でした。(因みに次の滞在先はロンドン)帰国2週間後に、イギリスのEU離脱が決まったことに少し感慨深いものがありました。

＊

最後に、今回のツアーに参加でき皆様と一緒に過ごせたことに深く感謝を申し上げます。今後も「あるっぱ会」の皆様とは長く深いお付き合いになると思いますが、何卒宜しくお願い致します。

## 欧州人情に触れて

東洋インキ㈱
中部支社営業一部第一課課長
渡辺　将二

新聞業界に携わり20有余年。drupaは2度目ながらCONPT-TOURは初の参加であり不安よりも期待が上回り、実際に終わってみれば得難い経験をした9日間でした。

drupa会場では予想はしていたものの広い会場を2日間目一杯歩き回り、足腰が悲鳴を上げていました。その中でも最新のデジタル印刷機を各メーカーが実機展示しており、そのあとで視察したイタリアの新聞印刷会社CSQ社(HPのデジタル印刷機を導入)も踏まえ、欧州では発行する印刷物(新聞含め)に付加価値を付ける為にデジタル印刷が根付きつつある事を実感しました。

＊

さてタイトルですが生涯2度目の海外訪問という事もあり、出来る限り現地の人々とコミュニケーションを取る事を秘かな目標としていました。とは言え、前回から特に英会話の勉強をした訳ではありあせんので基本的に適当な英単語(英会話と呼べる代物では無い)と身振り手振りが主体です。今回、drupa見学時は宿泊場所がオランダのマーストリヒト。その市街のレストランで現地の方に囲まれて食事をしましたが、自意識過剰か周囲の物珍しげな視線を感じながらの食事でした。それでも隣のテーブルの男性と『どこから来たんだ？日本か。日本は良い国だ』と会話？出来た時はちょっと楽しい気持ちになりました。レストランの近くに中華料理の店があり、ラーメンにチャレンジ。欧州ではラーメンと

マーストリヒトのラーメン

はこの様に解釈されているのかと衝撃を受けつつ(要するに美味しくはなかったです)やたらと飛ばすタクシーでホテルへ。ホテルの喫煙所では2組の中年夫婦と変なノリで盛り上がり、持っていた焼酎を1本空ける事になりました。因みに焼酎はかなり不味そうに飲んでいたのが印象的です。

*

最後の訪問地となったイタリア・ミラノではホテルから徒歩30秒の所にピザ&パスタのお店を見つけ、滞在していた3日間通い続けました。2日目には店のママさん？に顔を覚えてもらい、3日目には常連気分で店長夫妻と一緒に写真を撮りつつ別れを惜しんだのが良い思い出です。

お陰様で様々な経験をさせて頂いたツアーでしたが、団長はじめ参加者の皆様には大変お世話になりました。今後も『あるっぱ会』メンバーとしておつき合いの程、よろしくお願い申し上げます。

## テロ警戒に注意

**富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ㈱**
**新聞営業部部長代理**
**宇田　謙二**

欧州ではテロに対する警戒が非常に強くなっていることは聞いていましたが、今回それを実感する経験をしました。視察報告に関しては、他メンバーにお任せし、その顛末をご紹介させて頂きます。

*

ツアー4日目のフランクフルト空港、ロンドンに向かう便の手荷物検査の際、自動小銃を持った警察官に取り囲まれる事態となりました。心当たり無いのに、自分の手荷物がX線検査機を方向・向きを変えて十数回行ったり来たり、航空会社の担当者からの質問は一切なく、問題の手荷物も開けて確認している様に見えず。困惑していたら、航空会社担当者から警察に連絡が行き、当レーンは封鎖、後続客は他レーンに移り、航空会社担当者は退去、警察官数名に囲まれる始末。

その後、警察官に、手荷物の質問受けるが、うまく答えられず、ますます怪しい雰囲気となり、ソファーに座るよう指示され待つことに。続いて、状況を聞いた添乗員の松下さんが隣に来られ「落ち着いてください。テロ犯に疑われている可能性あります。他の部屋に移っても、わからないことは決して答えないこと。わかることのみ、はっきりとYes・Noと言う。あいまいなYes・Noは絶対ダメ」と冷静で的確なアドバイス頂き、ようやくヤバ

い状況と理解しました。

また、一緒に進んでいた我がツアーメンバー数名も、事の顛末を見てくれていたが、警察官に追われてしまい、松下さんと二人に。問題のないことを証明したいが、何も出来る状況ではなかった。警察官同士の会話も全くわからない中、警察官はどんどん上役が登場し、どうなるか不安増すばかり。

搭乗便の時間も迫る中、おそらく責任者のMr.Xが登場。いよいよ別室に呼び出されて‥と覚悟したが、Mr.Xは、私の手荷物を初めて開けじっくり長時間調べ、さらに数回X線検査を行い、結果を部下に連絡、その部下から呼ばれ、「行ってよし(言葉はわからなかったが、おそらくこのような感じ)」と言われ、あっけなく放免された。理由を知りたかったがその場から離れることに必死で全く余裕無し。その間の約40分は、非常に長く感じた時間でした。

＊

今回なぜ、このようなことが起こったのか？。後から関係者に聞いたところ、下記のどちらかが理由ではないかと思っています。

①荷物に入れていたiPad用キーボードと、イヤホンガイドケーブルが危険物に見えた。
（懸念物あれば、即通報らしい）

②空港に入ってから、私の行動や風貌が目につきマークされていた。よく東南アジア系と言われることはありますが・・。

ツアーの皆さん、お騒がせしたこと、この場を借りお詫びいたします。また、副団長らしいことは、全く出来ず申し訳ありませんでした。今後ともよろしくお願いします。

# TOUR 思い出の１コマ

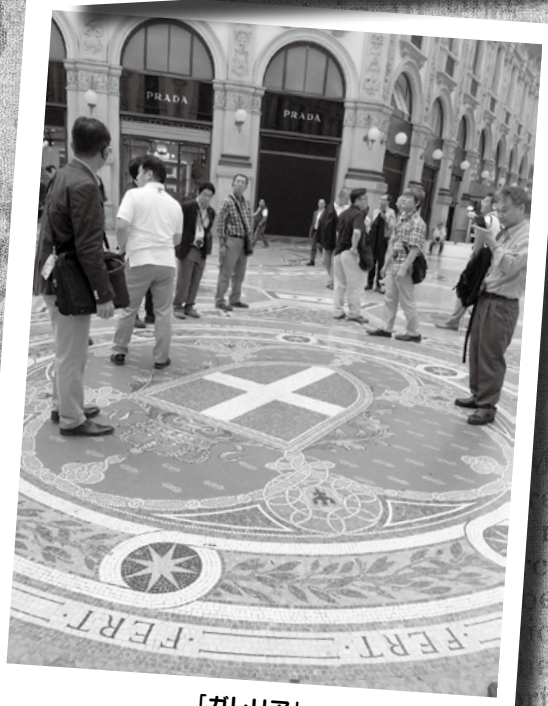
**「始まりの街」**
（日本経済新聞社・丸山 正人氏）

**「部数が激減している(リテーナ空港にて)」**
（共同通信社・黒澤 勇氏）

「横断幕を飾ってdrupa一色の歓迎ムード」
（日経首都圏印刷・峯田 武彦氏）

「ロンドン塔からタワーブリッジを望む」
（日経東京製作センター・藤崎 毅人氏）

「ミラノの路面電車」
（中日新聞印刷・加藤 泰一氏）




「ガレリア」
（ストラパック・飯山 雅志氏）

「全員集合」

# 新局長に就任して

## 頼もしく育ってくれた

宮崎日日新聞社
取締役印刷・システム担当　印刷局長兼
佐土原センター長兼システム統括本部長
**高橋　淳一**

宮崎市佐土原町の印刷工場･佐土原センターは、中心市街地の本社から北へ20キロに位置した、宮崎テクノリサーチパーク内にある。広い空間を占める印刷部門が本社から離れ､早いもので14年が過ぎようとしている。

4月の人事異動でシステム統括本部と印刷局を担当することになり、センターに足を運ぶ回数も減ってきたが、入社から36年、印刷部門一筋に務めてきた私にとって、輪転機のあるセンターは我が家と言っても過言ではない。本社でのデスクワークが増えてきたとはいえ、毎週センターを訪れ、我が子のような部員たちと会話を楽しむ日々。さながら、住み慣れた家を離れた単身赴任者のようで落ち着かない日々を過ごしているが、部員たちの日々の頑張りと努力のおかげで、今の私があると心から感謝している。まだまだ弱音を吐いている暇はない。

＊

近年、国内で地震や津波などの災害が多発し、本県でも南海トラフ巨大地震の懸念が高まっている。災害・輪転トラブル時の新聞製作の体制づくりは、私たち新聞社が第一に取り組まなければならない課題だ。

現場で指揮を執っていた時から、危機管理の重要性を部員に呼び掛けている。その取り組みの一つとして、可能な限りメンテナンスの内製化に力を入れ、あらゆる印刷トラブルを想定し、代替の復旧手段を準備するよう徹底してきた。部員も私の思いに答えてくれ、休日返上でシミュレーション作業を繰り返し、トラブルに応じたリカバリー方法をマニュアル化するなど余念がない。本当に頼もしく育ってくれたと自負する。

＊

そんな日々成長する部員たちの姿が見たくて、本社からセンターへ車を走らせるのが楽しみになっているが、町内に入ると、空を泳ぐ巨大なクジラの姿を目にすることがある。佐土原では端午の節句を迎えるとコイならぬ「クジラのぼり」が空を舞うのが風物詩だ。

こどもの日が近づくと、何匹もの親子クジラが大空を気持ちよく泳ぐ一味違った風景を目にすることができる。また「クジラのように立派にたくましく育ってほしい」と、江戸時代から町に伝わる「鯨ようかん」というお菓子もある。佐土原の地ではクジラはたいへん縁起の良いものとされている。

その他にもクジラをイメージして「鯨のアートシャッター」･「鯨畳」など、クジラにまつわる商品が数々ある。その一端で､この「クジラのぼり」が誕生したようだ。

＊

かつて佐土原の砂浜では日向灘でマッコウクジラの姿を見ることができたそうだ。その巨体を目にした人々は、自分にとって大切な存在が「クジラの様に大きく育ってほしい」との思いを持って生きてきたのだろう。その願いは古今共通で、佐土原センターに長年勤めていた私にも息づいている。

8月には長男夫婦に第一子(長男)が誕生する。来年の端午の節句には、わが家の庭先を気持ち良く泳ぐ鯨のぼりを早く見たいものだ。初孫のためにも初心を忘れずに責務を果たすことを誓いたい。

# 楽事万歳

## 五十の手習い

東洋電機㈱
エンジニアリング事業部営業部部長
加藤　隆夫

我が家の裏には、12畳ほどの庭が有ります。いつの日か忘れましたが、母がドクダミの可愛い白い花に魅せられたのか？我が家の庭に、ドクダミを植えてしまいました。毎年、毎年ドクダミの葉が目立ち始め、今では、5月には庭全体がドクダミの白い花に埋め尽くされて、ここ数年は、毎年5月になると、せっせと、草むしりの日を送る事が、私の日課となっていました。

＊

今年は、流石に、「やってれないよ」と、何か良い方法は、色々なホームページを覗いて、ドクダミはむしれば、むしるほど、カブが増えていくことを知らず、毎年、私はせっせと草むしりをしていました。解決方法は、やはり、除草剤を撒くことでした。

除草剤を撒いて一月後には、あんなに庭を埋め尽くしていた、ドクダミの葉がすべて枯れて、雑草で覆われていた庭がすっきりとしました。

その庭を眺めて、もう草むしりから解放された満足感と、でもすっきりした庭に何か物足りない寂しさを感じました。

＊

ある日、嫁の買い物に付き合って、お店にいると、みどりの日ということで、夏の暑さ対策に、緑のカーテンを作ってはと、ゴーヤの苗を1鉢頂きました。

1鉢だけ頂いてもと、除草剤を買いに行った時に、園芸店の店頭で、賑やかに夏向けの草花が並んでいたことを思い出していました。

何せ、生まれてこの方、植物にはまったと言っていいほど興味が無く、その時は何の関心も示していませんでした。

草むしりから解放されて、丁度暇していたところもあり、園芸店に出向くことにしました。

色とりどりの一年草、多年草がある中、所狭しと、トマト・ゴーヤ・茄子・胡瓜など野菜の苗が並んでいました。

まずは、ゴーヤの苗を3鉢ほど、ついでにミニトマトも3鉢ほど購入。

買ったはいいが、どう育てればいいか。

放置して、2週間、ミニトマトも20センチほど、ゴーヤもツルが威勢よく伸び始め、これは不味いと、慌てて育て方を勉強。

野菜用の腐葉土、ゴーヤには2㍍ほどのネットを、ミニトマトも2㍍ほどの支柱を購入。

それから、一ヶ月が過ぎて、ミニトマトには実が実り始め、ゴーヤは毎朝、見るごとに大きく育っています。

私は、というと、気が付くと、庭で野菜たちの育つのを楽しみにしています、いろんな方々の奮闘記をホームページで眺めては、次は何を育てるかと、考える日々になっております。世間では、五十の手習いと言いますが。私は、いつの間にか、野菜作りに魅力を感じているようです。

ちょっとした日々のきっかけで、人は変わっていくものです。

# わが職場（あれ これ）

## 桃源郷のふもとで新聞制作30年

福島民友新聞社 電算編制局電算部長　菅野 成一

弊社がある福島市は福島県北東部に位置し、近くには県庁などの官公庁があります。また、本社から4キロほどのところには、写真家の故・秋山庄太郎氏が「福島に桃源郷あり」と称賛した花見山公園があり、桜の季節には多くの観光客で賑わいを見せます。

今年は現在の社屋が竣工して30年。旧社屋からの引っ越し前日、手荷物程度の機材は自分たちで運んでしまおうということになり、500㍍ほど離れた新社屋まで、月夜のなか先輩たちと一緒に歩いたのを憶えています。

私が所属する電算部は、10年前には40人ほどいた大所帯でしたが、定年退職や他部署への異動などで、出向者を含め17人の精鋭部隊となりました。

業務は新聞制作関連が中心です。紙面制作組版支援から、システム系全般の監視・運用のほか、写真補正処理、グラフィックス作成一と、業務は多岐に渡ります。また同局の工程管理部門への支援も行いながら、オールラウンダー化を目指しています。

弊社は昨年、創刊120周年と紙齢4万号発行というメモリアルイヤーでした。私が入社した1982年は、鉛が姿を消し、”ホットからコールドへ”のCTS移行が完成した年。コンピューターと言えばメインフレームで、仮想化やクラウドなど、影も形もない時代でした。新聞業界がどう変遷していくのか分かりませんが、変化に対応できる職場環境の整備と人づくりを責務と肝に銘じ、次の世代にバトンタッチできるよう精励していく所存です。

## 初めての輪転機メーカーや工程管理に悪戦苦闘

㈱道新総合印刷　函館工場　製作部次長　吉田 亙

（株）道新総合印刷は北海道新聞の印刷工場として道内に6工場あり、3工場目となる函館工場に赴任して早くも1年3ヵ月経とうとしている。

ほぼ印刷職場で25年近く過ごして来て、三菱重工の輪転機しか操作したことがなかったが、函館工場は輪転機メーカーが東京機械製作所という事で、赴任当初はミーティングや現場で出る言葉に「それは何？」と尋ねる事も多く、また印刷が始まると機器の動作音なのか警報かの区別も出来ず反応できない毎日だった。

朝刊帯では道新本紙と受託紙があり、輪転機速度は15万部／h・カラー機は3台あるため印刷工程時間や輪転機編成には若干余裕も出てくるが、1セット工場のためミスを起こすと印刷・輸送工程に大きな影響が出るので確実な作業が求められている。

昨年から高濃度カラーインキを使用しておりカラー色調調整に苦労していたが、日々の整備・調整やメーカー・他工場からの情報収集などでインキ&水関数カーブの設定変更などを見直し、最近は安定したカラー紙面になっているのは部員の努力の賜物である。

製作部長の指示で工場内PCをLAN接続し情報を共有できるシステムを構築、またペーパーレス化などでコピー用紙削減（もちろん裏面も使用）や空調システムの稼働を細目に制御するなど、省エネを意識しながら小さな積み重ねでも、日々、コスト削減に工場一丸で取り組んでいる。

## 第5回CONPT技術研究会開く（東芝）

CONPT第5回技術研究会は「音声認識およびその周辺技術」をテーマに5月20日、日本新聞協会8階会議室で開いた。講師に東芝研究開発センター知識メディアラボラトリー研究主幹の河村聡典氏を招き、東芝インダストリアルICTソリューション社商品統括部のメディアインテリジェンス商品企画&技術担当の西山修氏が端末サポートを務めた。新聞社、CONPT会員社などから30名が参加、進行役は林克美企画委員長が担当した。

講演の要旨以下の通り。

### 音声認識の基本

音声認識の基本は、人の話す声をテキストに変換する技術である。この技術の進展によって、例えば保守メンテナンスあるいは介護の現場といったフィールドワークの支援システムが構築され、日常生活の場面では、話す人の意図を理解して番組を検索できるテレビや相続相談に対応できるシステムなどを生み出している。

音声認識には、グラマー型音声認識と大語彙連続音声認識の2つがある。グラマー型は予め決められた単語の流れを認識するもので、認識可能な表現は限定的となる。グラマーで記述された通り話せば精度は高いが、そうでないと認識してくれない。カーナビを例にとると、話し方（使い方）の分からない人には使いにくく、話しかけても認識してくれないので、使われなくなるようなことにもなる。

一方、大語彙連続音声認識は数十万語以上、語彙がカバーする範囲で任意の表現を認識できる。PCの高性能化、効率的な認識アルゴリズムの開発により、この10年で大きな進歩を遂げた。

連続音声認識の基本原理は、音声の特徴を抽出した後、それを音響モデル、単語辞書、言語モデルの3つの要素によって照合することで、精度の高い認識結果を出すというものだ。音響モデルは音素ごとの特徴をつかむもので、単語辞書は「今日」「は」「晴れ」「です」など、どんな発音からできているのかを把握する発音の辞書であり、言語モデルは単語の接続の統計的傾向、確率といった面から話し言葉を認識する。

認識性能の実用的性能の目安は一般的に85%だと言われているが、音響モデル、単語辞書、言語モデルを用途に応じてカスタマイズすることで、85%を超える実用性能を達成することが可能である。

### 音声認識の応用

音声認識技術を応用すると、フィールド作業の状況把握、見える化が可能となり、現場とオフィス（あるいは本部）双方の作業の効率化、品質向上が可能となる。

クラウドを活用し、現場では音声メモ、状況報告、問い合わせ、資料の閲覧といった作業、オフィスでは報告書の作成、記録の閲覧、作業指示など同時並行的に進めることができる。介護の支援や保守メンテナンスの現場などで活用が可能だ。保守作業に活用した場合を例にとると、ログビューで文章になった会話記録から、再生ボタンで選択して、その箇所の音声を再生できるし、サマリービューに切り替えて、会話の音声認識結果から自動でキーワードを抽出することもできる。

音声による文書の書き起こしの場合、ひとことの”つぶやき”によって、重要なことが忘れられずに記録できることもあり、文書作成

の大きなサポート役になり得る。取材の現場での活用も考えられる。

また、ユーザーの発話意図に沿った対話の技術も進んできた。例えば、「ママに"遅れる"って伝えて」と言うと、発話文を解析、意図を推定して、その意図に沿った応答を決定、「ママに宛てに"遅れる"というメールを送ります。よろしいですか？」という返答ができる。さらに進んで、いろいろな言い方を理解する柔軟な対話システムも登場、相続相談にも対応している。

意図の表現形態には多様性があるが、多くの表現パターン例から機械学習により、発言の意図を適切に推定・理解することが可能である。このような意図理解技術を応用したテレビを開発した。これは地上波デジタル6チャンネル、最大で過去15日間の番組を全て録画しておき過去番組を視聴できる「タイムシフトマシン機能」をもったテレビで、見たい時に声に出して伝えるだけで、いつでも簡単に見たい番組をみることができる。

音声認識の周辺技術として音声合成がある。近年、より人間の声に近い多様な音声の合成が可能になってきた。大人、子供、男、女…様々な話者の合成が可能だ。表現力も豊かになった。喜んでしゃべるし、悲しんでもしゃべる。怒り、喜び、悲しみを推定し、物語に感情をつけて読み上げることも出来る。

似声音声合成という技術もある。10分程度の元データから、その人にそっくりな声を作り出す技術だ。また、音声だけでなく、様々な表情を伴って話すことができる顔の合成システムも開発している。

私たちは、「人の言動を理解し、人にわかりやすく伝えることで、人と人の理解を支援したい」との思いを、「RECAIUS（リカイアス）」という造語に込め、「見る・聴く・話す」を補完・サポートするクラウドサービスとして進化させていきたい。

**（事務局）**

## 第42回定時総会開く

日本新聞製作技術懇話会の第42回定時総会を5月16日午後4時から、日本記者クラブ会見場で開いた。日本新聞協会から来賓として尾崎和典技術委員会委員長、神田俊英編集制作部長、藤高伊都編集制作部主管の3氏を迎え、会員社35社48名が出席した。

開会の挨拶に立った上坂義明会長は「今こそ力を合わせて新聞と関連業界の活性化に努めたい」と強調、尾崎技術委員長は「熱い思いを受け止め、一丸となって新聞離れを食い止めたい」と語った。神田部長もJANPSなどで懇話会との連携の方針を示した。

議長に上坂会長を選出し、平成27年度の活動報告に入った。評議員会は藤間修一副会長が新年度予算案などの議案説明も含めて報告。クラブ委員会（委員長・平井泰之氏）、企画委員会（委員長・矢森仁氏）、広報委員会（委員長・桑江暢也氏）は委員長がそれぞれ報告した。続いて、事務局が27年度の事業・会計報告、清水英則会計監事が会計監査報告を行い、了承された。

平成28年度の新役員体制では、三菱重工印刷紙工機械の懇話会担当者の変更により、企画委員長の矢森仁氏が退くことになった。代わって林克美氏（インテック）が委員長、副委員長に清水英則氏（清水製作）が就任。会計監事には木村和憲氏（KKS）が就任する。

今総会で承認された議案は以下の通り。

①総額2,148万8,000円の28年度予算
②新役員体制および2社の所属委員会変更
③クラブ委員会と企画委員会の担務一部変更
④設備分担金の廃止など懇話会会則の変更および役員選任に関する細則の改定
⑤平成28年度の事業計画

総会の後、懇親会に移り、12年余にわたって懇話会に貢献された矢森仁氏が中締めで「新聞界、懇話会の発展を切に願う」と結んだ。